

今年の四月、私の祖母は八十六年の生涯を閉じた。祖母は重い視覚障害者だった。四歳の時にかかった病の影響で、角膜に傷がつき、視界のほとんどを失ってしまった。しかし、祖母はくじけなかった。職を求め十代で単身鹿児島から上阪し、工場での仕事を心得て懸命に働いた。そして祖父と出会い、私の母を産み、育て上げてくれた。

幼い頃から大きなハンデを負った祖母の人生は決して楽なものではなかったと思う。しかし、祖母は持ち前の明るさとバイタリティで、困難を乗り越えてきた。それは、祖母一人の力でできたことではなかったのだろう。祖母は、口癖のように言っていた。

「ばあちゃんは、いろんな人に支えてもらえたから今まで生きてこられたんやで。だからちょっとでも世間様にご恩返しせなあかん。」

それを聞いた私は、漠然と祖母の言う世間様とは生活の手助けをしてくれる身近な人々の事だと思っていた。

しかし、祖母の死後、その考えが間違っていたことを私は知った。遺品の整理を手伝っていた時のことだった。ふと、母が祖母の障害者手帳を手に取り、

「この手帳がお祖母ちゃんを守ってくれてたんやね。」

と、つぶやいた。不思議に思って聞いてみると、私が生まれる前、祖母の角膜の劣化がさらに進み、完全に失明しそうになったことがあったそうだ。しかし、祖母のような重度の障害を抱えた人には、自己負担上限以上にかかった医療費の助成を受けることができる制度があった。そのおかげで、祖母はわずかな負担で角膜移植手術を受けることができ、かろうじて視力を失わずに済んだことを知った。そう、祖母は周りの人だけでなく、みんなの税金によって成り立つ、社会福祉制度にも支えられていたのだ。祖母の言っていた世間様は、身近な人々だけでなく、税金を納めてくれた全ての人々でもあったのだ。

私は衝撃を受けた。今、世界は、一人ひとりが違った個性や能力を持つ個人として尊重され、希望をもって、社会に参画できる「多様性社会」を目指している。祖母は、その理念が広がる前から、税金に支えられた社会福祉制度によって尊重され、懸命に働き納税することで社会に参画していたのだ。

当然「多様」の中には、祖母より弱い立場の人もいるだろう。そんな人を支える為には、高度な福祉サービスが必要となり、必然的に多くの負担が必要となる。納税なくして、どうやってこの福祉制度を守り続けることができるのだろうか。私たちは、納税するという目の前の負担だけに捕らわれることなく、税の正しい知識を持ち、多様化する社会を支えるために必要な負担をどう分かち合うかという本質こそを考えなければならない。それはだれかを助けるためだけでなく、いつか、自分も助けられることに繋がるのだから。